



「意味のない」時間

京都大学二年 竹生 晴彦

私は小学四年から高校三年まで珠算を続けましたが、率直なところ、珠算に打ち込んだ人間であるとはとても言えないと感じています。故に何を書こうか、と思案してみて、週に3回の通塾、当時の私の生活の一部を間違いなく形作っていたであろう時間の意味と言うものを、改めて思い返してみようと考えました。

私にとってあの時間、数字の配列を一心に追い続けていた日々は、ある意味では意味のない時間であり、しかしそれ故に私を励ましてくれるものであった。そのように思います。

私が珠算を始めたきっかけは、友人に誘われたから、という取り留めのないものでした。当時からずっと一貫していたのは、珠算は自分にとって「趣味」であるということです。大会で上位に入るとか、早く段位を取るとか、その様な到達的な目標に私が情熱を傾けることは最初から最後までありませんでした。しかし一方で珠算の時間を苦痛に思うことも一度もありませんでした。私は上達のため、検定のためというよりもただ珠算のために珠算をしていました。熱中するほどではないけれどそれなりに楽しい、一つの趣味として。

中学、高校に進んでも、私は（それほど辞める理由も無かったので）珠算を続けていました。しかし、この頃から珠算の時間には異なる意味が与えられるようになりました。

高校生の私は陸上部の練習に熱中するようになりました。私は三段跳びの選手として、少しでも速く走り、少しでも遠くに跳ぶために毎日数時間の練習を行い、試行錯誤を重ねていました。決して「趣味」などではない、本気の熱中です。並行して毎日の授業や土日の模試など、勉学も忙しく過酷なものになっていたため、当時の私の疲労や精神的負担は大きなものでした。

そのようななかで、必ずしも上を目指して苦しむことのない、ただその目的のために楽しんで行う「趣味」として私を救ってくれたのが珠算です。毎日、勉強と陸上で疲れ果てた後も、珠算塾に行ってただ数字と向き合うことで、心をリフレッシュさせることができました。それは当時の私の生活における数少ない「意味のない」時間でしたが、だからこそ無くてはならないものだったと、今になって気付きました。

実を言うと、珠算の方でもより高い段位を目指してがんばっていた時期はあるのですが、中学の頃から極度のあがり症に陥ってしまい、練習では高い得点が取れていても、試験場では手が震えて上手く動かせなくなり点数がほぼ半減してしまうような状況が続きました。そこで私は検定を諦め、代わりに月の頭にさくらそろばん塾で行うそろばんコンクールの模擬問題にやる気を出すようになりました。高三のころに一度だけ1000点満点中950点を超えることができたのは、(何の公式な記録でもありませんが) 嬉しい記憶として残っています。

私が珠算をしていた十年近くの時間は、言ってみれば大して「意味のない」ものであったかもしれません。正直なところ珠算の経験が今の生活の何かに活かされているかと言えば、少し答え難いところがあります(集中力などは多少育った気もしますが…)。しかしそれ以上に大切なのは、私にとってあの時間が間違いなく掛け替えのない心の支えになっていたということです。

珠算は、たとえ検定に受からなくとも、将来に活かせなくとも、それ自体として楽しいものです。今、珠算に励んでいられる皆さまにとってもそうであること、珠算が一人でも多くの人間の心の支えになれることを、心より祈念いたします。